

中等教育研究開発室年報 第33号 (2020年3月31日発行) 別冊電子版
2019年度 授業実践事例

国語科 中学校第2学年

「カメレオン」(チャーホフ) —社会を見る窓として—

授業者 加藤 健伍

(教育研究大会 公開授業)

広島大学附属中・高等学校

日時	令和元年11月29日(金) 第2限(10:35~11:25)
場所	第4研修室
学年・組	中学校2年C組 40人(男子19人,女子21人)
単元	社会を見る窓として小説を読む
教材	「カメレオン」(チェーホフ) 「新しい国語2」(東京書籍)所収
目標	1. 登場人物の描写を捉え、内容を正確に読み取る。 2. 登場人物の言動を社会風刺を語るものとして解釈する。 3. 小説には社会風刺を語る側面もあることを意識し、現代社会を語る言葉を探る。

授業について

国語科の授業を考える際、授業者は教材から最も効果的な問いを探し、それを授業過程に落とし込んだり、板書に反映させたりする。学習者は提示された問いを考え、ワークシートやノートを書いたり、話し合ったりする。この固定化された一方的な授業の流れを変えようとする動きは様々あるが、本校の国語科では「学習者が自ら問いを立てる」ことを手掛かりと考えた。

先にも述べたが、学習者は小説を読む際、登場人物の心情や全体の印象に目を向けやすい。「カメレオン」においては、オチュメーロフがころころと言動を変える様に注目し、その都度の心情の変化や、作品全体の滑稽さが、初読でつかむところであろう。題名と内容との連関についても、初読で疑問に挙がってくることが予測される。まずは自ら立てた部分的な問いを考えていき、続いて、小説全体を含んだ題名にまつわる問いを考えさせたい。それらの問いを考えた後に「カメレオン」という題名の意味が、登場人物の特徴を表すものとして理解されてきて、さらにそこに作者の意図を探る手がかりを見出すことができるだろう。つまり、自ら問いを立てて小説を読んでいったことが、次なる課題の発見につながっていくのである。

学習者がもつ問いは、これまでの学習や経験によって形成される。これまでにしなかった読みや、普段は考えないような問いについては、ときに授業者から与える必要がある。「カメレオン」においては、作者の意図や作品が成立した社会的背景を含んだ問いが、これにあたる。学習者から出るにせよ授業者が与えるにせよ、問いを通じて作者の社会に対するものの見方・考え方に迫っていき、さらに学習者が自らの社会に対するものの見方・考え方を表現することが果たせれば、探究的な深い学びを得られる、と考えた。

上に述べたように、「カメレオン」を小説の社会を語る側面としてとらえることを手掛かりとする本実践では、小説を「窓」と考えた。小説を読むことで、小説世界にとどまらず、作家が見た世界を体験することを目指す。またそこに直接関与するのではなく、作家が見た世界を間接的に見ることも、「窓」とした理由である。「窓」を通じて間接的に社会を見る目をもった学習者たちに、今その目の前に広がる社会に目を向け、それを語る言葉を探してほしい。自分たちのすぐ近くの風景だけでなく、その外に広がっている景色に目を向けてほしい。「カメレオン」という「窓」から見えた景色を通じて、学習者たちが社会に対して「窓」を開いていくことを期待したい。

指導計画(全5時間)

- 第一次 初読の感想から問いを挙げ、分類し共有する(*)。(1時間)
- 第二次 ②から③, ④, ⑤の順で、登場人物についての問いを考え心情や相互関係を整理する。(2時間)
- 第三次 ①を考え、小説を社会風刺を語るものとして解釈する。(1時間 本時 4/5)
- 第四次 自分の社会を見るものの見方・考え方を語る言葉を探る。(1時間)

*生徒たちが挙げた問い(詳細は別紙)

- ① なぜ題名がカメレオンなのか
- ② 「外とう」とオチュメーロフの心情の関係
- ③ 「群集」のあり方について
- ④ 表現・構成について
- ⑤ 小説の設定について

教材観

「カメレオン」は1884年に発表された短編小説である。登場する警察署長オチュメーロフが、他の登場人物の発言にころころと態度を変える姿やその根本にある権威主義と、発言者の権威性を考えられていない姿との矛盾を鮮明に描いている。その様子は、クリミア戦争に敗北し、急速に近代化していくロシアや、それを主導していた知識人たちの姿と重なるものとして描かれ、作品は風刺としての側面を強く有していると言える。また、作家として生計をたてていくことが難しかった作者が、自身の作品を作り上げていくことより、求めに応じて作品を書いていく自身の姿を重ねているものとも読むことができる。これらのことから、本作品は権威主義のもとで成り立つ社会や、そこに生きる個人に対する風刺の側面を強調して扱うことができるものであると考える。

指導観

新指導要領の「教科の目標、各学年・各科目の目標及び内容の系統表」において、小学校での教科目標では「日常生活」がキーワードであるのに対し、中学校では「社会生活」、高等学校では「実社会」「生涯にわたる社会生活」がキーワードとして挙げられている。中学校では個人の学びを支えとして、「社会生活」を念頭に置きながら、自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れることが求められているととらえた。自分が参画することを前提とした「実社会」を視野に入れること、それ自体は高等学校での目標になるわけだが、それを叶えていこうとする学びに「探究」の手掛かりをみたい。

このことを小説の読みにあてはめて考えてみる。学習者は小説を読む際、登場人物の心情や全体の印象に目を向けやすい。それらは小説を読む際に授業者たちが中心的に扱う事柄であり、この傾向をもつこと自体は自然なことである。そこで、小説の新たな側面として、作者の社会事象へのまなざしがあることに注目させたい。小説に表れる作家の社会へのまなざしに気付くことで、これまでの読みを広げ、さらに社会認識を涵養できると考えた。

「カメレオン」においては、オチュメーロフという人物が警察署長である、という設定がなされている。この設定は例えば「羅生門」で人物の固有名詞が用いられず、下人の姿は多くの人間にあてはまるものとして読むことができる、というものは対比的である。「カメレオン」には風刺の側面が強くあると考え、風刺の対象は人間一般の姿ではなく、社会での権力のあり方であると考え、扱っていきたい。「カメレオン」にある社会への風刺を読み取ることで、小説が社会を語る面をもつことを意識して読み、さらに「実社会」への感性を自ら表現する手がかりとしてとらえていきたい。「読む能力」にとどまらず、自分の意見を表現する力を育みたいがためである。小説の読みから得た視点を、社会事象を語る言葉を探っていくことにつなげていきたい。

小説を手掛かりに社会事象について考えていくことは、いくらかの飛躍を含んでいる。それを学習者の力で行えるようにするために、まずは自分たちで問いを考え、部分的なものから読みを積み重ねていき、全体にまつわる読みを作り上げていく。その後、作者の見た社会を見つめ、さらに自分たちの生きる社会を考えていくことができるよう授業過程を仕組んだ。

本校の取り組みについて

本校国語科では、中学生に隔週で「新聞記事を読もう」という独自の課題を課している。基本的にはスポーツや芸能などの記事を除いて、社会的な事象を取り上げ、記事を要約し、自身の意見や考えを書くものである。本授業に向けてこの実践に力を入れ、課題に取り組みさせるだけでなく、授業の中でそれらを交流させたり相互評価をさせたりして、社会事象への感性を養ってきた。

また、本校国語科では、毎年中学校2年生の3学期に授業でディベートを取り扱っている。ここでは社会事象に目を向けるだけでなく、それについて自分たちの意見をもったり、周辺の情報を調べたりといった学習も必要になる。その際、例年の傾向として、インターネットなどの情報を頼りに意見を構築していくことが多いように見受けられる。本実践を経ることで、小説にも社会の様子が現れることを認識し、作者はどのように社会をとらえているのか、といったことにまで思考が広がれば、と期待する。

本時の学習目標

1. 登場人物の言動を、社会風刺を語るものとして解釈する。
2. グループやクラスで考えを共有し、他者の考えを基にして自分の考えを表現する。

本時の評価規準（観点／方法）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・多義的な言葉を小説の文脈の中での確にとらえる。 (観察・記述の点検) 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の言動や心情について、叙述を基にとらえる。 ・人物像や小説の展開を具体的に想像し、作品が成立した背景も踏まえて解釈する。 ・現代社会を表す言葉を探る。 (観察・記述の点検) 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品に対して自ら問いを立て、それを解決していこうとする。 ・言葉がもつ多様な価値を認識し、小説の解釈を伝え合おうとする。 (観察・記述の点検)

本時の学習指導過程

学習内容	指導上の留意点・評価	評価の観点と方法
<p>〈導入〉 前時の振り返りをする。</p> <p>〈展開〉</p> <p>1 作品の題名が「カメレオン」であるのはなぜかを考える。</p> <p>2 「カメレオン」は誰のどのような様子を表しているかを考える。</p> <p>3 作品が成立した背景を踏まえて、作者の意図を考える。</p> <p>4 私たちが生きる社会の「カメレオン」について考える。</p> <p>〈まとめ〉 次時は、自分たちも社会を語る言葉を探していくことを聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までには、登場人物の関係性、それぞれの言動や心情をとらえてきたことを確認する。 ・「カメレオン」の特性で、作品全体に関わるものを言語化させる。 ・1で把握した特性が当てはまる人や描写を挙げさせる。 ・なぜそのような特性を有しているかを考えさせる。 ・作者が生きた当時の社会のありようについて伝え、作者の社会風刺の意図を読み取らせる。 ・作者のまなざしを、自分たちの社会を見る目に生かすよう伝える。 ・社会風刺のあり方や、それを語る言葉について考えていくことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の言動と題名を併せて読むことができている。(発言・記述の確認, ノート) ・同上 ・作品が成立した背景を踏まえて解釈することができている(発言・記述の確認, ノート) ・現代社会を語る言葉の手掛かりを探ることができている(発言・記述の確認, ノート)
備考		

生徒が挙げた問いと、その分類

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	席番
③	②	②	⑤	② ④	④	②	①	⑤	②	⑤	④	②	① ②	④	⑤		⑤	①	④ ⑤	分類
オチュメーロフの考えを聞いて群集はどう思ったか	「外とう」の場面ごとの意味は何か	なぜオチュメーロフは感動したのか 外とうの意味は何か	オチュメーロフは將軍の弟の方を尊敬していたのか	天気に関する描写の意味	最後の部分がどうなっているのかわかりにくい	なぜ犬側につくと寒くなり、フリーキン側につくと暑くなるのか	題名が「カメレオン」なのはなぜ？	なぜオチュメーロフの設定は署長なのか	オチュメーロフの感情の変化	結局、悪いのはフリーキンなのかオチュメー	「飢えた獣の口を思わせて…」は何を表している	外とうとオチュメーロフの心情の関係性	外とうと心情の変化の関係 小説の題名の理由	セリフの「:」「┘」の使われ方はどのような	なぜ署長は犬をこらしめようと思ったのか		なぜ初めは追いかけている状況から始まるのか	「カメレオン」の題名の意味は何か	この小説には人間への批判がこめられているの	挙げた問い
<p>①なぜ題名が「カメレオン」なのか ②「外とう」とオチュメーロフの心情の関係性 ③「群集」のあり方について ④表現・構成について ⑤小説の設定について</p>																				

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	席番
③	②	① ⑤	①	②	②	① ⑤	①	①	②	① ②	③ ⑤	②	①	①	②	②	①	④	⑤	分類
「群集」はどのように描かれているだろうか	外とうを脱いだり着たりすることとの関係性	この小説の中に態度を変えない人はいるのか	なぜ題名がカメレオンなのか	外とうを脱着したのは何か意図があるのか	外とうが何度も出てきているのはなぜか	「カメレオン」って何のことを示しているのか	なぜ題名が「カメレオン」だったのか	なぜ題名が「カメレオン」なのか	オチュメーロフが外とうを着たり脱いだりすること	外とうの着脱の理由 なぜ題名がカメレオンなのか	最後、何故 群集はフリーキンを笑いものにしたのか	なぜ恐ろしく暑いと言った後にぞくぞくするに変わったのか	「カメレオン」にどういう意味がこめられているのか	何故、題名が「カメレオン」なのか	短時間のうちに外とうを脱いだり着たりすることの意味	所々の「暑い」とか「寒い」とか言っている意味	直説描写のない「カメレオン」が題名のはなぜか	語り手と「:」書いてあるかのような「:」の書き方の関係	ロシアでの警察は誰がトップだったのか（將軍との関係）	挙げた問い

〈広場〉：飢えた獣の口 得られない 悲しげにこの浮き世を見つめている 不況 擬人法

オチュメーロフ

巡査

「騒動↓聞き取り調査」

フリーキン

「理由もなしに犬にかみつかれた」

飼い主の捜査

犬は撲殺

↑ 群集の中の誰か

「将軍家の犬の可能性」

← 「外とう」を脱ぐ：「恐ろしく暑い」

名誉を得る可能性 興奮 奮い立つ 緊張

↑ 群集の中の誰か

「フリーキンの悪事」

↑ 巡査

「将軍家の犬ではない」

犬⇖悪

毛並み・かつこう 悪い 汚らしい

↑ 巡査

将軍家の犬の可能性

群集

同意

← 「外とう」を着る：「ぞくぞくする」

名誉を損なう危険性 危機感

↑ プロホル 屋敷のコック

「屋敷⇖将軍家のものではない」

「将軍の弟のものである」

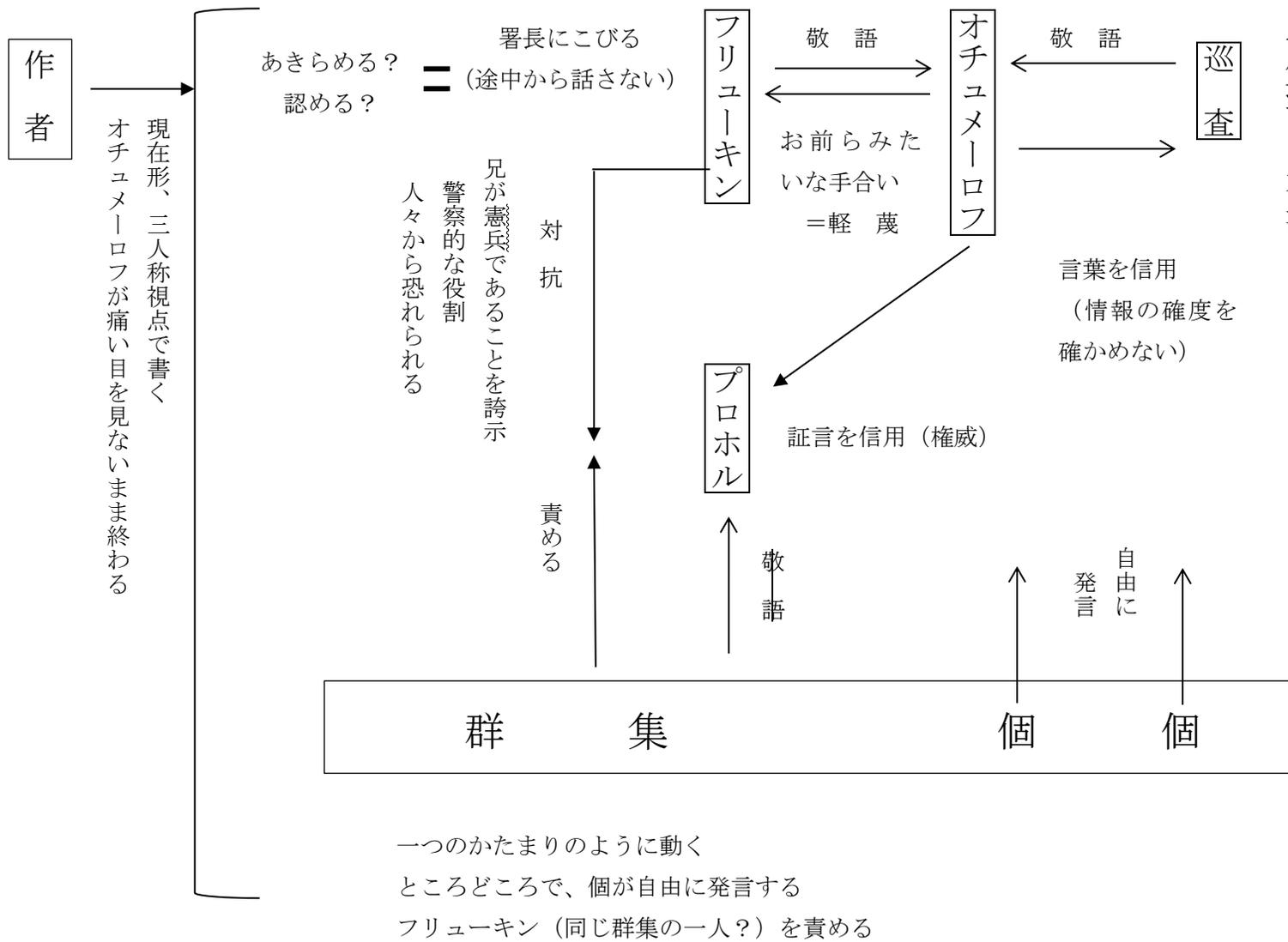
← 「顔全体が感動の微笑に輝く」

⇖ 事件解決の決定的な証言が得られた

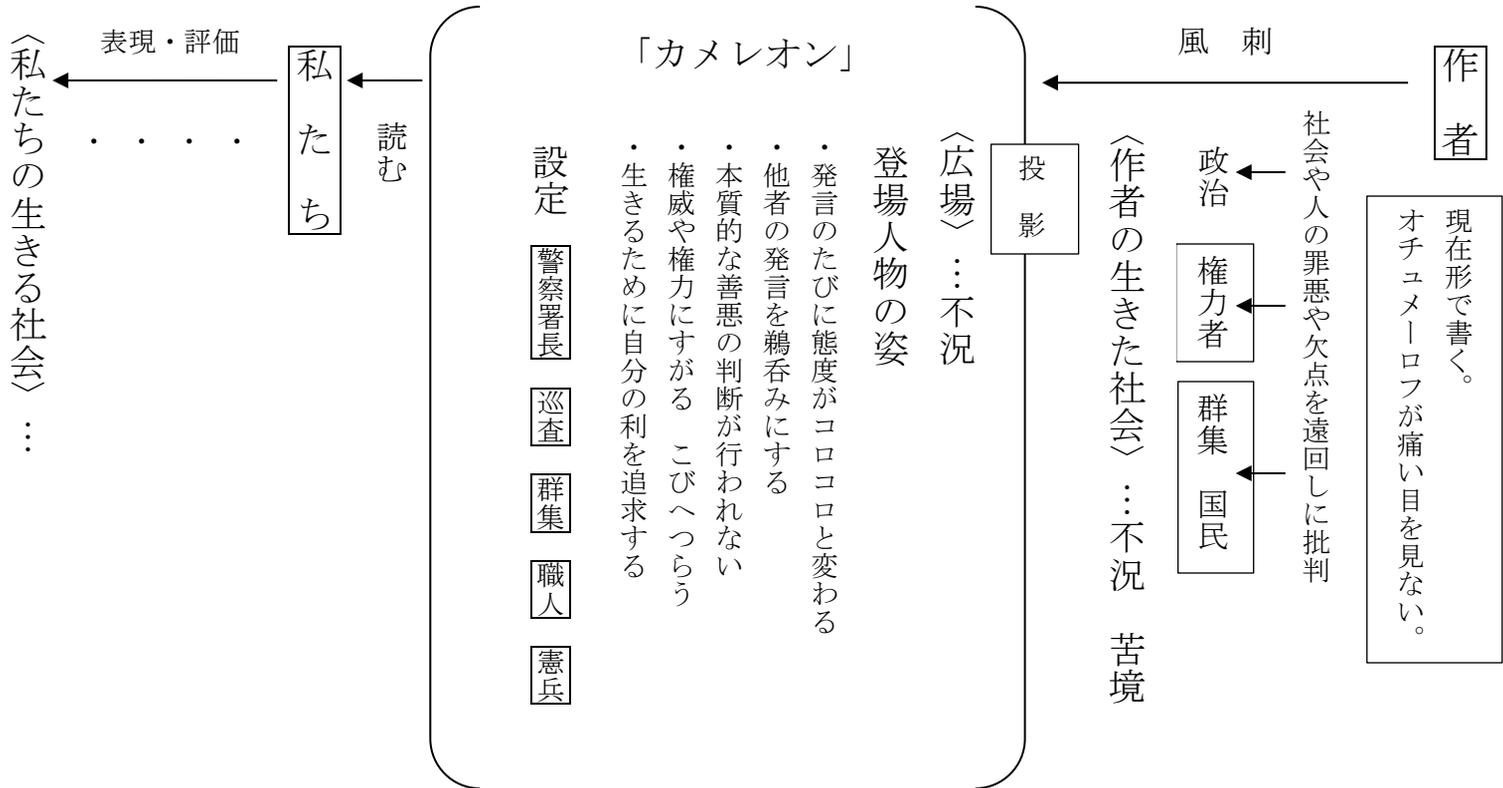
将軍の弟の **犬** を悪者とせずすんだ

自身の身の安全が確保できたことへの安心

〈広場〉…不況



現在形、三人称視点で書く
オチユメーロフが痛い目を見ないまま終わる



実践上の留意点

1 授業説明

本授業ではまず、これまでに考えてきた学習課題を確認し、小説世界の中に描かれているものをまとめるところから始めた。例えば、小説の主な場面設定である「広場」の描写が不況を示しているものであるということ、登場人物たちがそれぞれ権力を意識し、それに迎合することで生きていること、などである。後の授業展開上、まずは小説世界の中に描かれているものを丁寧に読んでいくことが重要である。

その後、学習課題にも早いうちから挙がっていたがこれまで取り扱ってこなかった、題名の意図についての課題に取り組んだ。具体的には、この学習課題に取り組むことで、作者が「カメレオン」という題名に込めた風刺を読み取る、ということになる。風刺という言葉は本時のグループ活動の中で出てきていたため、辞書的意味である「社会や人の罪悪や欠点を遠回しに批判すること」を押さえ、作者は誰を・何を批判しているのかという学習課題へと進めた。その批判の対象として、まずは警察などの「権力者」が挙がった。これはオチュメーロフの姿を警察一般の姿としてとらえなおした読みで、機能していない権力機関を批判するものである。続いて、「出版業界」という意見が挙がった。これは作者が誰に批判を届けたかったか、ということを中心に考えた意見である。国家や権力から作家への圧力があつたであろう、と当時の状況を推測して批判したもので、本文に立脚するものではないとはいえ、特徴的な意見であった。さらに、授業者からの働きかけで「群集」の存在について触れると、権力に迎合する「国民」や「民衆」といった意見も出てきた。学習者がどこまで読みを広げられて、授業者がそれをどこまで許容し、どう読みの広がりをもたせていくのかといったことが特に留意すべき点である。

こうした意見交流から当時の社会を構成しているものが見えてき、さらにその過程で、「広場」が表していた不況も、それがロシアという国自体や世界全体の状況を表すものであったことに至った。つまり、小説を書いた作者の意図を考えることで、学習者は小説世界の中に描かれているものが、社会の在り様を表すものであると気づいたのである。ここで本単元の主たるねらいである、「社会を語るものとして小説を読む」ことが達成できたと考える。それをさらに発展させて、現代を生きる私たちが社会をどう見るのかということ語る言語活動へと進めた。

2 研究協議より

- ・中学校二年生には難しい言葉が使われているように感じたが、語彙指導についてはどのように考えているか。
→「新聞記事を読もう」で難しい語彙をどんどんと獲得していくよう促す。また獲得するだけでなく、それを背伸びして使ってみるよう指導している。
- ・問いの分類の観点は学習者が出したものなのか。
→分類をまとめていくところも、学習者同士の交流で行った。授業者がファシリテートすることはあっても、こちらから与えることはなかった。一方でグループ協議においては、小説の問いはこれらの問いに集約されていくのではないかとということも意見として出た。言い換えれば、小説を読む際に普遍的な読みの視点を獲得した、とも言える。
- ・「問い」は本文に内包されている作家の「問い」であるのか、授業者が捉えさせたい「問い」であるのか、学習者が考えたい「問い」であるのか、それらがどのような関係性にあるのか。
→「問い」の違いについては考えることができていなかった。今後の課題として、構想・実践を繰り返しながら模索していきたい。